

# 平成29年度第1回白河市総合教育会議

## 議事録

1 期 日 平成29年7月21日(金)

2 場 所 白河市役所 3階 第2応接室

3 開 会 午前10時30分

4 出席者

(1) 構成員

職名		氏名
市 長		鈴木 和夫
教育委員会	教 育 長	星 浩次
	教育長職務代理者	金子 英昭
	委 員	鈴木 きよ子
	委 員	小松 裕子
	委 員	永山 均

(2) 市職員

職名	氏名
市長公室長	藤田 光徳
市長公室参事兼企画政策課長	吾妻 正明
市長公室企画政策課長補佐兼企画政策係長	藤井 浩司
市長公室企画政策課企画政策係主事	郷 千里
教育委員会事務局次長	齋藤 稔
教育委員会事務局参事兼教育総務課長	水野谷 茂
教育委員会事務局教育総務課総務係長	宮尾 宏樹
教育委員会事務局学校教育課長	荒川 文雄

5 議 事

(1) 歴史・文化教育について

①白河歴史の手引き「れきしら」の活用について

②文化を学ぶための特色ある教育について

(2) その他

6 閉 会 午前11時45分

1. 開会

○事務局(司会) それでは、定刻前ではありますが、皆様ご参集しているようですので、これより平成29年度第1回白河市総合教育会議を開催させてい

いただきます。本日は、ご多忙の中ご出席いただきまして誠にありがとうございます。

次に、総合教育会議は公開するものとなっており、現在のところ報道関係者の傍聴希望者が2名ございます。本日の会議につきましては、非公開とする議事内容はないと考えられますので、原則通り本日の会議を公開とし、傍聴を許可したいと思いますのですが、よろしいでしょうか。

(「異議なし」の声)

それでは、傍聴者の入室を許可したいと思います。

(傍聴者入室)

## 2. 議事(1) 歴史・文化教育について

### ①白河歴史の手引き「れきしら」の活用について

○**事務局(司会)** それでは、これからの会議の運営につきましては、白河市総合教育会議設置要綱第4条第3項の規定により、会議の議長は市長をもって充てることとなっておりますので、今後の議事進行を市長にお願いさせていただきます。

○**鈴木市長** それでは、今年度第1回総合教育会議の議長を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

では、さっそく議事に入りたいと思います。本日は、歴史・文化教育についてです。議事(1)の①白河歴史の手引き「れきしら」の活用について、議論したいと思います。事務局より説明を求めます。

○**事務局** それでは、議事(1)の①白河歴史の手引き「れきしら」の活用についてご説明させていただきます。

お手元の資料をご覧ください。

市内の各小中学校では主に、「白河の歴史文化再発見!事業」で「れきしら」を活用しております。児童・生徒が「れきしら」を活用して学習できるようにするために、小学校3年生以上の各学年で対象とする歴史文化について、「れきしら」の該当ページを明記した表を作成し、担任が指導しやすいようにしています。

活用の仕方としては、事前学習の資料、見学の際にはガイドブックとして活用しております。さらに、まとめ学習の資料など、目的に応じて活用しているのが現状です。

課題としては、第一に、活用する学年が限られるということがあります。

「れきしら」の表記・内容からすると、小学校低学年での活用は難しいと考えられます。しかし、教師の適切な支援や工夫があれば図や写真などを活用することも可能かどうかを実践を通して検証する必要があります。

第二に、「歴史文化再発見！事業」以外での活用をどう図るか、ということ です。

ある学校では、小学校6年生の社会科の資料として、平安末期源平合戦の学習の際に「陣屋跡」を、江戸時代の学習の際に「小峰城」を指導しております。このように、日本史の学習と平行して「れきしら」も学習することで、地域学習のつなげていく、という実践をしている学校があります。

それから、別の学校では、小学校6年生の国語の時間に、自分の町のパンフレットを作成する授業がありますが、その際に「れきしら」を活用する事例もあります。

教育委員会といたしましては、このような実践を市内の全学校に広げていく必要があると考えています。

続いて、目標および対応方針です。

「れきしら」を全ての学年、多くの学習で使用するために、デジタル化が必要と考えています。

「れきしら」をデジタル化することにより、低学年の授業などにおいて、「れきしら」に掲載されている図や絵、写真などをスクリーン等に投影し、提示することが容易になります。

学習指導要領の改訂により、新しい時代に対応する資質や能力として、ICT機器の活用が注目される現在、「れきしら」のデジタル化によって、授業でのICT機器の活用と「れきしら」の活用を同時に可能となると考えられます。

また、デジタル化によって「歴史文化再発見！事業」だけでなく、各教科および学校教育活動全体を通して活用することも可能となります。

さらに、「れきしら」に親しんだ児童生徒が、冊子を手に取り、じっくり読むということも期待できます。

○鈴木市長 今、事務局より「れきしら」を活用した状況、課題や目標について説明がありました。

この「れきしら」は、平成25年3月より配布が開始されましたが、作成の理由は、私たちがあまりに地元について知らないことが多すぎる、子どもたちに郷土のことを教えてこなかった、という痛切な思いからです。地元について、子どもたちに伝えたい、という考えが具体化したのが、この「れきしら」で

あります。

福島県内でも、先進的な取り組みであります。作成から数年経ちましたが、現在学校では、歴史新聞の作成の資料として活用しています。作成された歴史新聞は、現在白河市立図書館「りぶらん」に展示されています。立派な内容で、大人よりも深く地域のことを理解しているようです。

この「れきしら」あるいは、郷土の歴史を教育のなかに取り入れられたことで、子どもたちの意識は変わってきたのだらうと思います。

それでは、この取り組みについてどう思われるか、についてご意見等を伺いたいと思います。

金子委員はどう思われますか。

- 金子委員 教育基本法が、日本の教育の原点であります。そのなかの2条に「歴史と文化と伝統の教育」が謳われています。この条文を受けて、あるいは、市長自身の経験や考えがあつて、この「れきしら」は充実した内容になっている、という印象を強く受けます。

私たちは、どのようなところで生まれ、どのように育ったか、ということを知っておきたい、という本能的なものがあります。それが、ルーツとなります。最終的なルーツは、家庭なのだと思います。家庭を含んだ地域社会の重要性は、みんなが感じるものなので、そのルーツをしっかりとどって知っているということは、これからの長い人生を送る上で、すごく励みになると思います。情操面で言えば、育った地域の自然や文化・歴史の影響を多かれ少なかれ受けて育っているのだと思います。それがあつることによって、人間として豊かになり、困難にぶつかったときに、それを跳ね除けていける、見えない力になるのではないかと考えます。

単に、知識として重要なだけではなく、目に見えない無形の部分で、非常に大きな力になるのだと思います。

改めて、この「れきしら」を見ますと、どのようなスタッフが携わつたのか、と思うほどとても充実した内容です。どんな方が、どのような資料でこの「れきしら」を完成させたのか、そちらにも興味があります。

地域、郷土の歴史について、このような本の形となつて、教育で活用されているという例は、私は初めて見ます。福島県内だけでなく、全国的にもない取り組みだと思つています。

- 鈴木市長 「れきしら」ですが、これは専門家では決してない、当時のまちづくり推進課の職員が中心となつて、悪戦苦闘しながら作つたものです。

さきほど金子委員から、「目に見えないものが大事」というお話がありまし

たが、そのとおりだと私は思います。目に見える力で言いますと、英語力ですとか、数学でしょうか、それらもちろん大事です。

しかし、生活していく上で必要なのは、目に見えないものが圧倒的に多いのです。これを教えるのが、教育なのだと思います。

私たちが拠って立つ日本社会、日本人、そして宗教で、「私たちはなんなのだろう」「どこから来たのだろうか」という、自問自答がないと、私たちは、根無し草のようになってしまうと思うのです。そうならないよう様々なことを覚えていくのですが、その当然のことが、戦後教育の中で、あまりにもこれらのことを過小評価してきたのではないかと、思います。

だから、私たちの先祖から連綿と受け継がれてきた目に見えないものを、子どもたちに教えていくことが大切です。

では続いて、永山委員はどうでしょう。

- 永山委員 私は今まで、「れきしら」という存在を全く知らなかったのですが、今回の会議のため実際に読んでみました。内容が素晴らしく、写真も多く、大人が読んでも完成度の高いものだと思います。

私たちの時代にはなく、教科書だけの歴史の授業でした。歴史というのは、興味をもつとどんどん楽しくなり、知識を自ら吸収していくものです。逆に、授業だけであまり興味がないと、授業の内容が頭に入らないものでした。どの分野に興味をもつかは、子どもによってそれぞれなのでしょうが、「れきしら」のような資料でテーマを与えることで、より深く知ろうとしたりするのではないかと思います。私も実際、「れきしら」を読んで初めて知ったことがたくさんあります。分からないことがあれば、こういった資料を使い自分で調べて理解を深める、ということはすごく大事なことだと思います。

教育委員会の定例会のなかで話題になりましたが、中山義秀記念文学館や各地域の見学学習も実施されているようで、子どもたちにとっては、記憶に残るとても貴重な体験ではないかと思います。

将来にわたって一番役に立つことは、郷土愛だと思うのです。そして、白河をずっと愛してくれる者がいることが、この取組みの成果ではないでしょうか。

- 鈴木市長 芥川賞作家の中山義秀の本には、最後まで大信、生まれ故郷のことが書いてあります。愛郷心があるのが強く伝わります。

文学記念館ができるまで、地元の人でも中山義秀のことをよく知らなかった、誰も教えてくれなかった、ということがありました。やはり、教えていくことが必要なのだと思います。

小松委員はどうでしょうか。

○**小松委員** 「れきしら」から少しそれますが、私は子どもの頃、五教科のなかで、歴史が一番苦手でした。しかしその後、よく旅行に行くようになったのですが、旅先の歴史や文化を知っている分だけ、楽しめるということも大人になってから痛感しています。自分の子どもには、歴史を知ることによって大人になってからも楽しめるのだ、と折に触れて伝えています。

市長や教育長のお話でよく出てくるのが、「まず、自分の地域を知ること、そして白河市を知る、福島県を知る、東北を知りそして日本を知る。これで初めて、海外で日本を伝えることができる」という言葉です。日本人としてのアイデンティティを伝えるために、身近な地域のことを知らないと、それを発信できないことを端的に表現していると思います。

実際、自分も同様の経験をしました。学生するとき、アメリカにホームステイする機会があったのですが、いかにして自分を伝えようか悩みました。私は、子どものころから日本舞踊を習っていたので、それで伝えようと思いました。

浴衣を持って行き、お別れ会の際には自分で振り付けをした舞を披露しました。他に、ホームステイ先で書道をしたりしました。自分を、そして自分の国を相手に伝える、ということをしごく意識したときでした。

自分の生まれ育った土地に愛着をもつということは、教育の基本になると思います。今手元にある「歴史文化再発見！事業」で作成した新聞を見ますと、子どもたちが土地のことを深く調べていることが伝わってきます。この授業は、できるだけ継続していくべきだと思います。子どもたちが土地に愛着を持つ良い機会になると思うのです。

○**鈴木市長** では、続いて鈴木委員、お願いします。

○**鈴木委員** 今小松委員が話された新聞ですが、小峰城や南湖公園の有名なところだけでなく、ごく身近な地元のことも、子どもたちは調べたものもありました。子どもたちがしごく真剣に作成に取り組んだことが伝わります。

私も、この取組みは長く続けて欲しいです。

あとは事務局の現状や課題、目標から、歴史・文化教育はしごく進められているな、と思いました。先日行われた青少年育成協議会で「白河版魔笛」を中学生に見せたというのは、文化と歴史の両方を教える上で、素晴らしい試みだと思います。

事務局の話にありました「低学年には難しい」というのは、確かにそうですね。デジタル化は、是非進めていただきたいです。

- 鈴木市長** 今、小松委員と鈴木委員からもありましたが、愛郷心や誇り、アイデンティティが大事だと思います。私たち首長、あるいは国政の政治家は、地域づくり、地方創生など行います。この根本には「故郷をなんとかしたい」という気持ちがないと、制度があるときだけ貢献し、そのあとが続きません。先祖代々大切にしたい地域を何とかしたい、という愛郷心が基礎にないとどのような施策を行っても意味がありません。ここまでで、教育長はいかがでしょう。

- 星教育長** 歴史教育のため、「れきしら」として具体化され、それが学校教育の授業で実際に活用されていることは、とても素晴らしいことだと思います。昨年末、市内の小学生が一同に会し、自分たちで調べたことのプレゼンテーションを行いました。子どもたちは班の中で、自分の調べたことを一生懸命他の人に伝えようとしていました。このような発表の機会は、また設けたいのですが、いまのところ諸事情で校内での発表に止まっております。いずれにしても、子どもたちが自分の生まれ育った場所に興味関心を抱くというのは、しっかりとした自分のルーツを確認することにつながります。二十年、三十年後に、必ず誇りとして出てくるものでありますから、大事にしたいところです。また、自分の故郷を知る、ということは、他者の歴史や文化があることを推察させ、他者を尊重する心につながるのではないかと考えます。決して、自分の故郷だけが唯一素晴らしいのではなく、他者にとってもそのような場所があることを想像させることが必要だと思います。

- 鈴木市長** こういう授業を受けて、子どもたちの反応はどのようなものでしょうか。

- 金子委員** 聞くところによれば、子どもたちの表現や話のなかに、自分たちの地域の歴史や文化に誇りを持つようになった、と子どもたちの言葉で書かれているそうです。

- 鈴木市長** 明治以降の日本において、上京し就職して社会的地位を築いて「故郷に錦を飾る」ことが、人間の成功のパターンとされました。そういう風に、東京に人材を出してきました。これは、間違いではないです。しかし、このパターンでは国は栄えますが、地方は衰退します。国を支えるため、優秀な人材が東京に行くことは必要です。同時に、地域を

支える人材も必要なのです。そうでないと国家としてのバランスに欠けます。

「故郷【で】錦を飾る」ことが、大切なのです。これも、一つの生き方だと思ふのです。地域を守り、支えていくことが非常に重要です。

そのため、教育のベクトルを変えていくべきと私は考えます。つまり、今までどおりの教育ではなく、地域の歴史文化教育に取り組むことです。

これから、日本の各地で同様の取組みが行われると思います。そうして、地域について学んだ子どもたちが増え、これから二十年、三十年後、日本はきっと変わっていきます。

私たちの時代の教育は、ひたすら中央、東京へ向かうものでした。価値観の尺度も中央でした。中央主体で学んだ私たちと地域を学んだ者とは、見える風景がガラリと変わります。

この取組みによって、これから日本は精神的に豊かになっていき、世界から尊敬される民族になっていくのだと思います。

白河市で行っているのは小さな取組みではありますが、じわじわと効果を発揮していくでしょう。

以上から「れきしら」の活用については、おおむね好評のようです。

では、次の議事に移ります。

## 2. 議事（1）歴史・文化教育について

### ②文化を学ぶための特色ある教育について

○**鈴木市長** 議事（1）の②文化を学ぶための特色ある教育について、事務局より説明を求めます。

○**事務局** それでは、議事（1）の②文化を学ぶための特色ある教育についてご説明させていただきます。

市の特色ある教育として挙げられるのは、「歴史文化再発見！事業」です。

小学校では、1年生の「昔の遊びを知る」からはじまり、暮らし、伝統・文化について学び、中学校では、松平定信について学び、歴史・文化を発信する、縦の流れで計画しています。

これらの成果については、平成28年度に「実践事例集」としてまとめました。そこで取り上げられた実践は、歴史面では伝承遊びや昔話、中山義秀、五箇地区の遺跡。他に、松平定信公、来年150周年を迎える戊辰戦争まで、多彩な学習の事例が取り上げられています。

さらに文化面では、茶道や醤油、そして安珍歌念仏踊り、さらに小峰城を題材にした「絵を描く会」までが取り上げられています。

課題としましては、さきほど紹介した縦の流れの学習の成果を、横の流れ、つまり国語や社会などの各教科や道徳、総合的学習活動などの各領域で、

どのように深化させていくか、ということです。

例えば、小峰城の体験学習では、社会科の歴史学習や「れきしら」を用いた事前学習で興味や関心、疑問や意欲などを喚起することが必要です。また、実物に触れる段階では、「れきしら」のガイドブック的な活用や取材の仕方など、事後の学習では文章表現やレイアウトする力などが養われることが考えられます。

場合によっては、写生など絵画表現との関連を図ることができます。

小峰城の石垣の修復は、文化財保全の意識、さらにこの体験を生かして道徳の授業で郷土への誇りや郷土愛を育むことができます。

このように関連して学習を広げ、さらに学区内の人的資源、物的資源の活用によって、学習の対象を広げていく必要があると考えています。

今まで当たり前のように取り組んできた学習のなかに、「歴史文化再発見！事業」と関連させて、地域の良さを味わわせることが可能となります。

続いて、目標についてです。

このように関連させるため、「白河市学校教育プラン」を構想しました。

プランは、国や県の施策と連動させ、「白河市教育大綱」に掲げる「未来を切り拓く人間力の育成」をどう具体化するか、を明確にしたものです。その第一に「歴史・文化教育による郷土愛の育成」を掲げました。

歴史・文化の学習を各教科及び教育活動全体を通じた体験学習にまで拡張し、地域の物的資源や人的資源を活用した学習活動をもとに、道徳教育を関連付けながら、教育活動全体で郷土愛を育む教育課程を作成し、実施することに取り組んでいきます。

さらに市では、児童生徒の豊かな感性や想像力を育てるため、質の高い舞台芸術を鑑賞する機会を設け、小学生にはキッズシアター、中学生には舞台芸術鑑賞授業を実施しています。

○鈴木市長 今、事務局より文化を学ぶための特色ある教育の現在の状況、課題や目標について説明がありました。

小学生、中学生で学年ごとにそれぞれテーマを設け、具体的に実践していることが分かりました。

今、話にあったことその他、具体的に子どもたちにどのようなことを学ばせればいいのか、私もよく考えます。

関辺の「天道念仏」を学んで欲しいと思っています。太陽が出るように、疫病が発生しないように、という願いをこめて、地域の方が総出で集まって祭りをします。他の地域でも同様に、豊作祈願や疫病を防ぐために祭りをしています。

これは、農村社会の気象やサイクルに適ったものなのです。私が幼少のころ

には、もっとたくさんのお祭りが行われていました。しかし、現在に至るまでに廃れていったものが多くあります。

現在では農法も異なりますし、機械も導入されているため、祭りがなくなっていくのも致し方ないのですが、伝統文化がなくなっていくのが現状です。

学校の教育とは別かもしれませんが、このような身近な地域の生業や気象と密接に関わる文化が消えていってしまう。こういうものも、学校の現場で教えていくことも必要ではないでしょうか。

小峰城や白河の関など、メジャーなところは教えていますが、地域の私たちの生活の在り様など、身近なところに踏み込めれば素晴らしいと思います。

以上を含めて、文化を学ぶための特色ある教育について、ご意見を求めたいと思います。では、鈴木委員からお願いします。

○鈴木委員 私は「子ども教室」を開いていますが、伝統行事として、七夕祭りやお月見、団子さしなどを行っています。団子さしなどは、なるべく自然素材で団子を作り、子どもたちに昔ながらの味に親しんでもらっています。

話は変わりますが、私の地元の東地域では、「ハッテング様」という伝統行事があります。火事を防ぐためのお祭りですが、現在も続いています。

○鈴木市長 私が幼少のころは、表郷地域で奉納相撲をする祭りがありましたが、今では相撲はせず、お札を配るといふ風習だけが残っています。

各地域の祭りの意義を、子どもたちに伝えていく必要があると思います。さきほどの団子さしですとか、お月見も大事な風習です。

○鈴木委員 団子やそれに使う餡子は、買って来た物ではなく、なるべく手作りしたものにしています。

○鈴木市長 手間をかけるということが大事ですね。

私たちが高度経済成長を経験したことで反省しなくてはならない点は、「物を買ってくればいい」という意識です。物を作り、大事に扱うということを疎かにしたことです。

永山委員はどうでしょう。

○永山委員 私の場合、団子さしなどの行事に必要なものを探すだけでも苦労します。例えば、団子さし用の木を山に探しに行っても、どれがそうなのかわかりません。

子どもたちに文化を伝えようにも、知っている大人がいなくなることが心配です。

あとは、さきほどの事務局の話に「郷土愛を育む」というものがありました。

私たちの年代において、郷土は旧大信村や旧表郷村などですが、「れきしら」で学ぶことで、今の市内の子どもたちが白河市全体を「郷土」と意識するよう

になるのではないかと思います。

特色ある、たとえば、私が幼少のころ地域の公民館に劇団が来たことがありました。今でも、印象に残っています。そして昨年度、市に文化交流館の「コミネス」ができ、オペラや公演が行われ、児童のための鑑賞会が行われているようですが、白河市と歴史を関連させた取組みがあれば、子どもたちの記憶に強く残るのではないかと、思います。

- 鈴木市長** さきほど話にあった伝統行事などは、その時代の人が手作りで作ったものですが、現在の大規模で機械化された農業の時代には、維持することは難しいのかもしれませんが。

ただ、新しいものを作り上げていくことはできるかもしれませんが。昔ながらの風習を守るだけでなく、時代に沿った行事を作るという視点も必要でしょう。

- 小松委員** 私は農業とは無縁の家庭で育ちました。なので、団子さしなどには参加する側でした。子どもたちを連れて、地域の家を回るというのは、田舎ならではのようです。

地域の文化を残すため私ができることとしては、家庭で行事のための料理を子どもたちに作って伝えていくことだと思います。

- 鈴木市長** 食文化、というのも大切ですね。昔はなんでも自家製でした。農家などでは、醤油や味噌、納豆にいたるまで。それが当たり前でした。

買って来たものでも、食を通した親子の会話があるのでしょうか、一緒に作ったものを囲んで、一緒に食べて家族が交流する文化はなくなってきていますね。食育の一つですから、とても大切なものだと思います。

食は家族のコミュニケーションだけでなく、地域のコミュニケーションにも関わります。これもまた消えつつありますが、自宅で作った料理を介在して、地域と関わりをもつ、という習慣がありました。

この習慣が、完全になくなるとは考えにくいですが。地域で生きていくには、地域とのコミュニケーションが重要です。支え合いや助け合いには、普段からの交流が必要ですから、どこかでこの習慣は行われるはずです。地域のあり方が変わったのであれば、新たなコミュニケーションができるのでしょうか。

こうした地域との関わり方について教えていくのもまた、教育の役割なのではないでしょうか。

金子委員はいかがでしょう。

- 金子委員** 事務局から説明がありました、小学校6年間、中学校3年間の文化に関する教育は、子どもたちの発達段階によく合ったものだと思います。大きな意味があるので、是非続けて欲しいです。

以前、小学校に勤めていたときに、今でも念仏踊りを行っている、という話を聞きました。理由を調べたところ、小学校で教えている、ということでした。

地域で維持が困難なため、学校に取り入れられたそうです。

夏休みに子どもたちが集まり、地域の方が教えるそうです。本番の祭りでは、「小学生の部」と「大人の部」に分かれて、踊りを披露します。そのように工夫することで、途絶えることを食い止めることができるのだと思います。

私たちは、西洋文化を取り入れたことで、根無し草のようになりつつありました。しかし、幸いにも国際化が進んだことで、私たちが置いてきたもの、日本の文化は、今海外の人に注目されたことで、見直されています。私たちも自国の文化の素晴らしさに気がつきました。これからは、国際化と地域性が調和していくかもしれないですね。

マスコミの報道を見ますと、色々な行事を復活させようとする市町村が増えてきているそうです。これは、海外からの観光客を意識した視点もあるのだと思います。

国際化と地域性というのは、一方を重要視し、他方を軽視するものでしたが、今は違うようです。

地域性で重要な役割を担うのが、学校、教育なのだと思います。子どもや青年が減り、伝統を知っている地域の方がいなくなりつつあります。そんななかで、学校教育で地域の伝統を教えていくことで若い世代が育っていくのだと思います。そうしないと、伝統は途絶えてしまうでしょう。

白河市文化交流館「コミネス」ができたことは、文化後進都市であった白河にとって大変良いことだと思います。それまでは、市外に行かないとそういった質の高い文化芸術に触れることができませんでした。しかし、「コミネス」ができたことで、一流の方を見ることができます。ようやく、白河市も文化的に豊かになるのだなと感じました。

この「コミネス」で白河市の地域の伝統文化や伝承を発表できれば、更なる広がりを見せるのではないかと思います。

○**鈴木市長** 「安珍・清姫伝説」なども、学校で教えられているから、小学生や中学生も立派な伝統文化として、継承されています。

さきほど、金子委員から話がありましたが、グローバルとローカルは共存するものです。共存しないと、地域はつぶれます。優劣ではありません。ローカルだけでなくグローバルな視点を取り入れないと、地域は流行りません。そして、ローカルなところに、外国人は惹かれるのです。だから、インバウンドで民泊が注目されています。地方都市の何気ない普通の生活が見たいから、民泊に需要があるのです。飾らない農村の風景や桜の景色が残っているのが、地方なので、日本に何度も旅行している外国人は、日本の本当の伝統文化を見るために、京都や東京ではなく、地方へと行きます。

背伸びをして観光客を呼び込んでも、長続きしません。飾らない普段の生活を見せる。しかし、その地域を本当に愛している人がそこで生活をすることで、

生活の姿勢の素晴らしさ、地域の愛嬌の心を伝えるのです。外国人の日本人に対する尊敬の念を深めることができると思います。

地域を知る、文化を知ることが、世界につながっていくのです。

○**星教育長** 伝統文化を残していく。これにはやはり、最少の単位である小学校がしっかりと伝統文化を残していくことを意識した学校教育をそれぞれの学校で展開していかなければならないと思います。それとともに、小学校単位で、地域の人材の協力を得て、地域ならではの伝統を継承していく。これが、将来子どもたちの誇りにつながると考えています。

もう一つ、豊かな感性を育むには、洗練された質の高い舞台芸術や音楽を、幼い頃から体験させることが、より効果的だと思います。日頃の授業の思い出より、小学校のときに見た舞台の方が、より記憶に残ると思います。そのために、子どもたちの鑑賞機会を設けたいと思います。

教育委員会として、これから更に歴史・文化教育に力を入れていこうと思います。

○**鈴木市長** ありがとうございます。

先日、白河市に住んでいた方が「久しぶりに来たら、すっかり変わっていた」と言っていました。何よりも、駅前に文化施設が集まっていることに感心したそうです。図書館にも行ったところ、人口に対し、本の所蔵量や種類が豊富で図書館の見本のようなと思ったそうです。「コミネス」にも足を運び、音響の質の高さに驚いたそうです。

やはり、白河市は文化後進都市というイメージがあるらしいです。しかし、新たな施設によって、印象が変わってきました。これもまた、子どもたちの自信や誇りにつながるのだと思います。これは一つのシンボリックなものなのでしょう。

学校司書の配置や図書館の蔵書を充実させることにお金をかけ、教育にお金をかけることが、人材を育てることにつながるのです。企業は人なり、地域も人なり、政治家も人なり、といった「人」を育成するのは、家庭や地域、学校、社会の総合力です。そういったバランスの良い人間を生み出すため、歴史・文化教育は重要なのです。

以上、「れきしら」の活用など、市では歴史・文化教育に力を注いでいます。他に歴史・文化教育で要望があれば、教えてください。

それでは、この議事についての意見交換は終了してよろしいでしょうか。

(「異議なし」の声)

では、続いてテーマにこだわらず、ご意見・ご要望等あれば教えてください。

○金子委員 「しらかわ検定」の小学生版はどうでしょう。

○鈴木市長 この「しらかわ検定」は、人気があります。県職員の方も多く受検したそうです。昨年度は3級が実施されて、今年度は2級を実施します。  
確かに、小学生には難しい内容かもしれません。

○永山委員 昨年度は、小学生が5人受けたそうです。一般人向けの内容ですし、もう少し難易度を落として、4級とか5級があればいいのではないのでしょうか。世代に応じた試験内容を作って欲しいです。

○鈴木市長 ご意見ありがとうございます。今後の参考にいたします。他には何かありますかでしょうか。  
ないようですので、これで議長の任を終えたいと思います。ご協力ありがとうございました。

### 3. その他

○事務局（司会） ありがとうございました。それでは、次第3その他となります。

（特になし）

### 4. 閉会

○事務局（司会）

以上をもちまして、平成29年度第1回白河市総合教育会議を閉会いたします。ありがとうございました。